

今、たずねるべきこと

新型コロナウイルスが世に出てから1年が経ちました。事態は収束するどころか変異ウイルスが発生し、改めて死への恐怖が広がりつつあります。ワクチン接種も始まっていますが、もうしばらくは「三密」「ソーシャルディスタンス」「マスク・手洗い・アルコール消毒」の生活様式を続けることとなりそうです。仕事の面ではテレワークや在宅勤務などが推奨され、「リモート」という言葉も飛び交うようになりました。高田教区においても「ZOOM（ズーム）」といわれる機能を使った、リモート研修会が始まりました。現地に赴き、目の前で先生のお話を聞く生活が当たり前の世代としては、パソコンやスクリーンを使って自宅や教務所でお話を聞くことに戸惑いを感じています。



リモート：遠隔〈『広辞苑』〉

リモートとは、遠い、離れた、遠隔の、隔たりのある、かけ離れた、間接的な、などの意味を持つ英単語。

〈例〉遠隔操作⇨リモートコントロール 略称「リモコン」

ITの分野では、離れた場所にある二者（人や機器など）が通信回線やネットワークなどを通じて結ばれていることを表す。【リモートネットワーク】

どうやら「リモート（ネットワーク）」とは「離れた場

所にある2つのものを結ぶ」ことのようにですが、実はこれに似た環境が皆さんのお宅にもありませんか？

・・・そう、仏間です。



仏間にあるお内仏（仏壇）は本山・東本願寺やお手次寺院のお内陣を模しています。中央にご本尊「南無阿弥陀仏」が安置され、お浄土が表現されているお内仏は極論すれば浄土と穢土をつなぐ場ともいえるでしょう。私たちは意外にもすでにリモート環境に触れていたようです。

あかおの道宗、もうされそうろう。「一日のたしなみには、あさつとめにかかさじと、たしなめ。一月のたしなみには、ちかきところ、御開山様の御座候ところへまいるべしと、たしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべし」と云々
〔蓮如上人御一代記聞書〕

今から500年前の蓮如上人の時代から、「一日一度は合掌念仏、月に一度はお寺で寄合、年に一度は本山参り」と伝えられてきました。日本各地からの本山参りは命がけであったことでしょう。だからこそ、近所のお寺での聞法生活を大事にし、各家々でお内仏（仏壇）を安置するようになったのだと思います。またそれは、飢饉や戦など頻繁に「死」に直面する生活の中で、「釋（尼）○○」と法名を頂戴し「仏・法・僧の三宝に帰依する」生活を送る、仏弟子としての歩みが真宗門徒のたしなみとなったことと無関係ではないように思えます。

現代にあらわれた「新型コロナ」は、私たちに死の恐怖を与えると同時に、改めて真宗の教えにわが身をたずねていく機会をつくってくれているようです。コロナ禍の今こそ、「人と生まれたことの意味」をたずねるときです。この機会に帰敬式をお受けし、ご自宅にお内仏を安置して、真宗門徒としてともに聞法生活・念仏生活をすすめることが、今、願われているのではないのでしょうか。

「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」

2021年3月25日 高田教区教化委員会副本部長

第六組 善念寺住職 滋野康賢